

第20回新生匠瑳戦略会議 会議録（概要版）

開催日時：平成24年11月5日（月）

午後7時00分～9時10分

開催場所：匠瑳市役所議会棟第2委員会室

出席委員：（学識経験者）渡辺新

（団体推薦者）宇野充紘、萱森孝雄、鈴木和彦、橋場永尚

（一般公募者）大塚榮一、岡田陽子、永野亮太、林暁男、八木幸市

（10人／名簿順）

欠席委員：（学識経験者）鎌田元弘、木村乃

（団体推薦者）安藤建子、越川竹晴、越川八代枝

（5人／名簿順）

市出席者：（事務局/企画課）小川課長、大木副主幹、富井副主査（3人）

【 議 事 】

（1）提案書（最終報告）について

- ・本来なら本日、最終報告の原稿が仕上がり、最終報告（案）を提示できる予定であったが、アクシデントもあり完成には至らなかった。本日は、未完成の部分を除いて原稿のチェックをお願いしたい。
- ・これまで「市民協働」、「ヨソ者視点」、「中間支援機能」というキーワードで中間報告をまとめてきたが、いずれにしても抽象的な議論が中心であった。しかし、実際に具体的な提案をするときには、匠瑳市の実態をとらえた上でなければ、匠瑳市の未来は現れないと思う。
- ・市内でブランド化され、産地を形成しているものもあるが、地域で生産されているものを地域ぐるみでブランド化していくときに、地元の人とその味を知らなければ応援できない。ただ、地元で多く流通させると、価格が下がると同時にブランドとしての価値も下がってしまうという問題もある。
- ・市内農産物直売所の代表として「ふれあいパーク八日市場」がある。設立当初からのコンセプトは、「都市と農村総合交流ターミナル」であるが、現在の停滞している状態をさらに発展させるためには、やはり地域づくりの中にしっかりと位置づける必要があると思う。

- ・ふれあいパークにあるレストラン「里の香」の当初のコンセプトは、農家レストランであった。そこで提供しているうどんは、地元飯塚の自粉で作ったものを使用し、天ぷらとして出す野菜も地元でとれたものを使っていた時期があった。
- ・市外の視点から市内を見ると、里山や檀林はいいものに見えるが、行おうとしている事業が地元に住んでいる人の収入や生活につながらないと、住人はいなくなってしまう。
- ・植木の技術というのは、枝をひねって曲げていく技術だが、元々は盆栽からきた技術である。最近では、傷物を作ってしまうということで、そういう技術を使わない人もいる。また、接木の技術が発達しているので、なるべく傷を作らずに造形するという手法もあり、そういう技術で造形されたものの価値は高くなる。
- ・市内の海岸地域には水産問屋が多く存在するが、そこで使っている発砲スチロール製の魚箱を、植木組合で研究していたバイオマスプラスチック製の魚箱に変えることができれば、環境問題に配慮しつつビジネスチャンスにもつながると思う。
- ・「畜産・食品リサイクル」については、すでに市内で行っている会社もあるが、1999年に施行された「家畜排せつ物法」により、生産農家は家畜の糞尿などの処分に困っていると思う。しかし、困っているときこそ、今がチャンスととらえなければならず、香取市の和郷園はここから出発し、リサイクルセンターに発展した。
- ・里山については、まず竹やぶの問題と生物多様性の危機を考えなければならない。人間の手が入らなくなってしまうことが問題であるが、里山を利用する目的は多種多様であり、単に自然や生物多様性が大事というだけでは、地元の人々の共感を得られないと思う。
- ・里山に関連して「山百合プラン」という項目を作ろうと思っていた。里山が荒れていると山百合が咲き出せないという実態があり、山百合はまさに里山の象徴であるといえる。
- ・商店街の現状として認識しなければならないことの一つは、普通の大手メーカー製品を買おうとしたら、大型店や大手チェーン店などで買った方が安く済むということである。商店街ではそれらの商品とは異なるものを扱い、差別化していく必要がある。
- ・先日、社会福祉協議会の会議に出席したときに、買い物支援の話が出ていた。これからの時代は物を買いに来ってもらう時代から、売りに行く時代が変わっていくべきだと思った。
- ・「地域づくり」については、現在ある飯高とか野田という地区名は、明治時代にできた村の名前で、現在は行政上の区分けである。ただ、最も社会生活の基礎的な単位

としては、自然発生的にできた農業集落ではないかと思う。

- ・「地域づくりのための組織」では、「匠瑛農業塾」、「里づくり協議会」、「商店街復権会議」について触れている。いずれの組織も、直接関わっている人だけで考えていくのは限界があるので、その他の多様な分野から選出された人で組織を構成する必要があると思う。
- ・「そうさの米研究会」の取り組みに対する考え方に、「ブランド化の成功は、農業の振興という一次的効果だけではなく、地域イメージの向上や観光等各種産業の収益拡大にも結びつき、匠瑛市の活性化に大きな役割を果たすと考えられるのである」とあるが、まさにこの通りだと思うし、そうなってほしいと思う。
- ・「地産地消」を徹底させることも必要である。日本の農業がどうあるべきかという視点で考えると、事業領域拡大という考え方は必ずしも正攻法とは言えないが、生産者が生産だけに縛られることはなく、経営やマーケティングにも参入していくことで、ビジネスチャンスや新たな知識などの習得にもつながる。
- ・「循環型社会と地域エネルギーの地産地消」については、食品リサイクルなどから有機肥料を作り、それを農業生産に還元していただくだけではなく、さらにそこからエネルギーを作り出すというものである。
- ・バイオマスを利用して作られる燃料に木質ペレットがあるが、これを進めていくには、薪ストーブに近いものを復活させて普及させていかなければならず、市民の生活スタイルを変えることになるので容易なことではない。ただし、一部の使用に留まってしまうとコストが高くなってしまうので、地域ぐるみで取り組まなければならない。
- ・「農業用水による小水力発電」については、従来のやり方でいくと、発電事業を実施する際には改めて申請・許可が必要であったが、2011年からは従属して発電する場合の水利権取得がかなり簡略化された。農業用水を利用する人たちの負担も考えてもらい、その負担を軽減していけるような取り組みを積極的に検討していくべきだと思う。
- ・「海岸地域の振興」については、当初補論で書くこととしていたが、正直迷っているところもある。なぜなら、「匠瑛の魅力ある海岸づくり会議」の中で、技術者たちが今後の侵食状況について明確な回答を出していないからである。個人的には侵食は徐々に進むものと思っているので、侵食されることを前提としたまちづくりを作っていかなければならないと思っているが、結論が出ていないことを最終報告に記述するのは疑問である。
- ・「海岸地域の振興」について、深い議論はしていないにしても、実際に海岸を視察し

たり、現状認識についての議論は行っている。議論した結果、海岸づくり会議の動向を見守るという結果になったので、その経過を書けばいいのではないか。

- ・本日出された意見も踏まえて、最終報告の原稿を完成させるので、再度内容をチェックしていただきたい。
- ・原稿のチェックについては、委員長が指名する5人の委員で構成される小委員会で行うこととし、そこで出された修正意見を反映させたものを最終報告(案)とする。

(2) その他

- ・次回の会議(小委員会)は11月10日(土)13時30分からとし、市役所議会棟第2委員会室で行う。
- ・最後の戦略会議については11月16日(金)とし、小委員会での修正を経た最終報告(案)の最終チェックを行う。
- ・市長への提出は、委員長、副委員長により11月20日(火)に行う。